中高生とともに差別と闘う

伝えたい『が』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

親猫の思い

小学四年生の娘の担任に続き、校長先生にも自らの出自を明らかにし、そのうえで自分が受けてきた部落問題学習や部落差別について語ったシンジ。自問自答する自分を吐露します。

＊

自分の中では、ここまでしなくてもいいんじゃないかと思う部分でも、ここまでしてあげないとアカンの違うんかなって思ってしまうんです。ていうのは、中途半端な情報がいっぱい流れすぎてるから――

＊

彼が中学生の頃の多くの親御さんがそうであったことを思い出します。実際私も、そこまでしなくても、どうしてそこまで、と感じることは多々ありました。

当時、私と同い年の、地区出身のあるお母さんと話していたとき、そのお母さんが、自身の父親について話しはじめたことがありました。父親は、議会議長まで務めた町の有力者です。お母さんは、その父親にとって、年の離れた唯一の末娘でした。

「父さんは私を何とかして差別から遠ざけようとしたのだと思う。私が中学校に上がるときも地元の中学校ではなく遠くの私立に行かせたり。この家もわざわざ地区外に土地を買って家を建てたり。けど、いくらそんなことをしても、まわりのみんなは知っている。それでも父さんは、私をどうにかして差別から遠ざけたかったのだと思う」

切ないです。あまりにも切ない。父の思い。父の思いを馬鹿にすることなく受けとめる娘の思い。でも、そこまでしてでも、何とかして親は子を守り抜きたいと思ったのだと思います。その関係性は、親子にしか分からないのかもしれません。まるで、「砂の器」の父子です。そしてシンジもまた、形は違っても、我が子を守り抜こうとしているのです。

伝えたい「が」

話は一転します。

＊

今日来る前も、今までずっと娘に言えなかったことがあって。「学習会」っていう言葉を言えなかったんですよ。

娘にね、何か怖い話して、とせがまれることがあるんです。実は学習会に行った帰り道に怖い出来事に遭ったことがあって。心霊系のやつ。そういう話をするんですけど、その出だしが、「塾みたいなとこ行ってて、その帰り道にこういう経験をして」っていう言い方しかできなくて。学習会の「が」まできてるんだけど、出てこないんですよね。伝えても分らないっていうんじゃなくて、「学習会」って言ったら、学習会の説明をして。したら、こういうことなんだって、また説明しないといけないっていうのができなかったんです。

＊

言いにくいこと、言いにくいときって、こうなりますよね。

ここでいう「学習会」について注釈しておきます。「学習会」の正式名称は、「同和対象地区学習会」でした。

部落差別によって行けなかった学校、得られなかった学力、就けなかった就職、それらを何とかして正したいと強く強く願う地区の人々の願いのもとに、「学習会」はつくられました。その名称だけを聞くと、勉強だけをしているところのように感じるかもしれませんが、ここで言う「学習」とは、三つのことをさしていました。

一、基本的な生活習慣の習得
二、基礎学力の獲得
三、同和問題における立場の自覚

これらを、「仲間づくり」に重点を置いて取り組んでいました。

週に二日、夜七時ごろから九時くらいまで、地域にある集会所やコミセンのようなところに集まり、学習をしていました。なかには部活動からそのまま、お腹をすかして参加する子もいました。それでもそこに行けば、なじみの顔があり、あたたかい空気が流れていました。

教えるのは学校の先生です。部落差別をなくしていく力や学力をつけることも、公務員としての責務だからです。しかし、そのことがよく分かってない人のなかには、「地区の子だけ先生にタダで教えてもらえていいなぁ」と言う人もいました。不当な「ねたみ」であり、そういうのを「ねたみ差別」といいました。

一番伝えたいことは

春には開講式、夏休みには一泊研修、年末にはクリスマス会などのお楽しみ行事もありました。秋祭りの季節には文化祭として作品展示をしたり、意見発表をしたり、人権劇を上演したりするところもありました。また出店が出たり、地域の太鼓や獅子舞を披露するところもありました。それらは、地区外にも開放されていました。地区に出向き、互いに交流することで、部落差別意識を少しでも解消できれば、という思いからでした。

これらの行事は、全国のどこにでもあった地方別子ども会のようなものでしたが、「学習会」ではそのすべてが、部落差別をなくしていくための、大切な空間であり、思い出の行事だったのです。

法が切れ、多くの学習会がなくなってしまいました。それでも、当時学習会に通っていた子どもたちにとってそこは、気持ちの通じ合う、大切な仲間たちと過ごした、何物にも代え難い、宝物のような思い出に溢れた場所であることに変わりはありません。

一番伝えたいことは、一番大切なこと。けど一番大切なことは、一番言いにくいこと。本当は伝えたいんだけど、喉の奥につっかえてなかなか言葉が出てこない。そのような心情を、シンジは何度も繰り返していたのです。

イラスト　中島　亜唯